

何か記念にと考えていましたら、平成二年十一月十二日に行われました平成の「即位の礼」正殿の儀で威儀者が弓矢や矛、盾など威儀物を奉持して参列しましたが、その時に使われたのと同じ梓弓あすなぼこです。宮内庁に四十八本納入された精魂込めた記念すべき逸品です。学園に大切に保管されていますので、御希望の方は史談会を通じて御見学においで下さい。学校行事にも使用いたし歴史を現代に生かしたいと考えています。

梓弓については民俗学から中世には、より代としての歴史がありますが今回は紙面の都合にて割愛し、即位式の写真や使用された梓弓の写真のをのせることにします。

住吉様のお祭り

祭研究同人

「コンコンチキリン…」と鉦や太鼓のお囃子も賑やかに海上渡御が行なわれる住吉様のお祭りも、いまはもう見ることでない夏の風物詩となってしまった。

住吉様は、上筒男命・中筒男命・下筒男命の三筒男命と氣長足比売命をお祀りする社で、市内の浜町（通称向浜）に鎮座している。この神社の勧請には次のようないきさつがあった。

「宝暦四年（一七五四）二月、大坂に向った別府村の舟人が伊豫沖で暴風雨にあい、舟が転覆しようとした。この時、舟人たちが摂津の住吉大神に一心に祈願したところ風雨がおさまり無事大坂に到着することができた。その足で摂津の住吉大神に詣でたところ『吾を祈ること感ずるにあまりあり わが神霊を豊国に祭るならば末世に至とも汝を導き海上を守る』との託宣があったので、神宮寺に立ち寄り神霊をうけた。

永井右京は、その神霊を奉持して三月二日に大坂を立ち同月十日に帰村し、吉日の同月十九日に朝見宮の神伊織を宮主として万登浜に祠を建て鎮座奉った。」（託宣）

万登浜（のが浜）に勧請された住吉様は、寛政三年の朝見八幡社の無名文書によると、

「右御旅所（松原にある八幡社の）ノ内南ノ方ニ住吉宮一社御鎮座有之、摂津ノ住吉宮ヲ奉御勧請只今迄八十

年程罷成申候……とあるから、寛政三年（一七九一）には現在地に遷宮されていたことになる。

住吉様の神幸祭（夏祭り）には、神輿の先達を務める楠浜（旧別府村）の「ほうあんえ」と神輿かつぎおよび海上渡御をうけもつ地元の住吉・向浜上下（旧浜脇村）の祭組との二座が主要な役割を担^はってとり行なわれた。このことは、住吉様が鎮座した由来に関係があるものと考えられる。

地域の経済・社会の変化が信仰の本質をかえ、祭祀組織をくずすといわれるが、住吉祭においてもずいぶんと簡略化が進み、ついには祭の形そのものが変わってしまった。せめて、住吉祭りが盛であった明治後期・大正・昭和初期ありさまを、地域の古老の記憶をもとにして再現してみようと思う。

祭の準備

地元では寄合を行ない、住吉・向浜上下の長老格（総元）より祭の行事をとりしきる二人の座前（ザマエ）を決め、それにくわえて十人組（祭典取締役）がえらば

れ、それぞれが祭の役目を受け持つて祭の準備を始めた。

神職は宝暦年間より八幡朝見神社の神氏が勤めた。

神輿かつぎには、株持（神輿株）の家十二軒の若者か、酒一升で当年限りの株を借りた若衆が大役を果たすことになっていた。神輿かつぎの若衆は、七日前から拜殿で宮ごもりして物忌に服した。この期間は、食事は自宅でするものの女性との接触はつよく戒められ、女性が調理した食事は口にせず、母親とも口をきかぬものとされていた。

楠浜の「ほうあんえ」にも、古くは船持ち（廻船業）の株座的な組織が最近まで残っていた。

祭の前夜を宵宮（ヨド）といい、お舞堂（神楽殿）で深更まで余興がもようされた。

お祭の日 旧暦六月二十七日（現行七月二十七日）

ご神体奉納前の神輿と神輿かつぎの最後のみそぎが行なわれた。神輿かつぎは禊のみの裸、はだしで海に入って、神輿に潮をかけて神輿かつぎ共ども潔斎した。この

ことをシオカケ（神輿あらい）といった。帰りには白緒のワラジをはいてかえた。このワラジは祭がおわるまでは決して脱がない。神社にかえると、拜殿で白の六尺褌に裾の短い白衣、白鉢巻の神輿かつぎの装束を身につけてお立ちを待った。

シオカケから帰ると神輿を神殿に入れ帷を垂れて、神主が一人でご神霊を奉納入した。ご神霊がは入ると神輿がきゅうに重くなるといわれる。

こうしてオクダリの準備がとこのう頃には氏子も大勢おしかけ、鉦や太鼓のお囃子も一段と賑やかになりお祭りのムードも高まってくる。

シオカケと並行して楠浜の「ほうあんえ」の水汲みがはじまる。赤い肩まわしを着けた「ほうあんえ」のカイテンマ（權伝馬）が沖を漕いでチョウケ（長桶）一荷の水を、浜脇の清水まで三度汲みに行った。一番水は「ほうあんえ」の座前が汲みに行きナオライの調理にもちいられた。

「ほうあんえ」は座前の座敷で本膳になおりお神酒をいただく、赤の頬かぶり、赤の肩まわしと赤の六尺褌

という出で立ちで、手に手に菱形の紙を束ねて竹に付けたダイ（采）を持ち一団となって住吉様におもむいた。

（清水は両郡橋より浜脇よりのソーズの卯水を汲んだとか、秋葉神社したのアメガタヤ屋横の井戸水、西町の角井戸とか諸説ある。）

いっぽう、向浜では浜で船を見張り「一番が通った」「二番が通った」と報告し、神幸の目安とした。

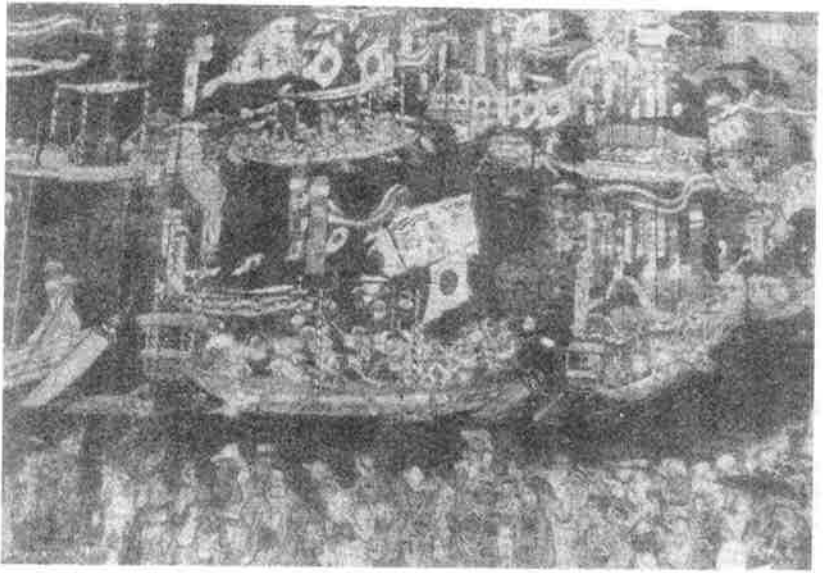
「ほうあんえ」が住吉様に着くとオクダリとなる。

神幸行列は、「ほうあんえ」やお供の若者・賽銭箱・太鼓や鉦の囃子山車を従えて中心を神輿が行く。神輿は十人がかつぎ、輿前に潮まきと後にしんがりの各一名がついた。神輿のまわりには若衆が、ワッサ ワッサと囃子たて神幸に景気をつけた。

海上渡御

神輿は、向浜の船溜から輿船に乗り出発した。

海上渡御は、神輿の御座船を中心にして、定められ船列で行われた。最盛期（大正・昭和初期）には三十艘ちかくの供船が渡御のお供をした。二挺櫓の網船がそれぞれ屋形をしつらえ、船印や大漁旗をなびかせ、笹に提



海上渡御図（別府市立美術館蔵）

灯などを飾ったた供船は、かって、唐破風の屋根をもった屋形船もあったそうである。

供船の先頭は地元の向浜で、楠浜など以北の地区の船がさき、浜脇など以南の船があとで、しんがりには向浜のこども船がつづいた。船列の中心は神輿の御座船で、その直前を「ほうあんえ」の權伝馬が行き、ダイフリが「ホーアンエ」の掛け声をかけて大げさにダイを振り先達を勤めた。供船にはそれぞれの地区の若衆が乗り込み、ワッサ ワッサの乱痴気踊りや鉦の「コンコンチンコンチキリン」の船囃子で賑やかにお伴をした。

海上渡御は、まず南にむかい両郡橋の手前で折り返して北上し、的が浜沖まで行きつて引き返し、楠浜（旧棧橋）の船溜りに上陸して楠浜・北浜・海門寺方面の神幸が行なわれた。

御旅所は、それぞれ網元や旧家の約三十五ヶ所があてられていた。神輿は門前に笹二本に注連縄をわたした祭場でお休みになった。神輿が旅所に着くと、いったん通り過して引き返す所作をして、威勢のよい波形のガブリを行なった。このガブリは住吉様独特のもので、差し

上げた状態から一方にかたむけ、ちょうど波がうち寄せるように斜め下に流し、また、差し上げて同じガブリを繰り返しておつきになった。

神輿かつぎが、ときおり神輿を肩から降ろして手に下げた格好で一目散につっ走るといふ勇壮な場面もたびたび見られた。

旅所では朝見八幡の宮司が祝詞をあげた。

北部地区の神幸がおわり、ふたたび神輿を御座船に乗せればオノボリとなる。暗くなった海上を明か々と提灯をともした輿船が、天を焦がす迎え火に迎えられ向浜の船溜り帰ってくる。上陸後は浜脇・向浜地区の御旅所をめぐり、深更になって住吉社に還幸する。このとき社頭で盛大にガブリ、勢いをつけて鳥居から拜殿に突進する神輿を若衆や中老が何度も押し返し、繰り返してやがておつきになる。

むかしは、竹を切って横笛をつくり、激しく躍動した祭の終りにふさわしい静かな曲を吹いたそうであるが、現在は吹ける人もなくなつた。

その晩、神輿かつぎや若者は、神酒をいただいて拜殿

に泊まった。

海上渡御については、天保十年（一八三九）の記録がある。別府村の庄屋高倉桂翁に招かれた日出藩の儒学者小川民徳の筆で、

「…暮二及ビ翁ト涼棚ニ遊ブ 予ノ後二土人舟ヲ浮ベテ至ル七八艘ナリ 帷帳ヲ垂レ燈ヲ無数ニ張ル 鐘鼓ヲ競ヒ越シ歌吹間作シテ海中ヲ往還シ 以テ神ヲ娛シム 観ル者堵ノ如シ…」

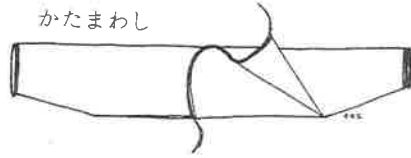
と記されている。住吉祭りの過去の姿である。

「ほうあんえ」のこと

「ほうあんえ」は、さきに述べたように楠浜の舟持ちを中心にして組織された宮座である。ダイを振って神輿の海上渡御を先導する「ほうおんえ」は、住吉様の祭にとしては主要な役割をもつ集団であった。

「ほうあんえ」が乗り組むカイテンマとは、水汲みと渡御の先達をつとめる、六挺の櫂で漕ぐ小舟のことである。

海上渡御のときには「船ぼり」に旗竿を立てて、住吉



かたまわし

丸の船印をかかげた。さおの先より船のオモテとトモに綱を張り提灯など吊るして飾った。

カイテンマには、左右に三人づつで計六人で櫂を漕ぐカイモチ（カイフリ・カイビキ）といわれる漕ぎ手と、後部で樽太鼓をたたく者と、トモに酒樽を二段に積み上げた上に乗るダイフリ一名が乗り組んでいた。

ダイフリは、浴衣にたすき掛けという衣裳で（大正時代の絵では肩まわしのまま）樽の上に立ち、のけぞらばかりの大げさな所作で両手のダイをふり、音頭を取った。

ダイフリが「ホーランエンヤサ」とダイを左右に振りながら音頭をとると、カイビキが「ホーランエーノ ヨンヤサノサッサ」と唱和しながら櫂をひいた。櫂にはシユロを巻いているので音頭にあわせてギュッキュツと鳴らして調子を取った。このことを櫂をネルといった。



ほうあんえ

「ほうあんえ」には、「宝来栄」「宝安栄弥」「蓬菜へ」などの字が当てられるが、このことばは神事のときだけに用いるものではないようである。

有名な豊後高田市の「ほうらいえんや」では、「音頭がフォーエンヤという「かい」をもつ若者が掛け声をそろえて『ホーランエーヤ ユヨサノサッサ ヨイヨイヨイトセ』と若宮へと船をいそがせる（豊後高田市誌）」とあるので神事と関わりが考えられる。しかし、和歌森

太郎氏の「くにさき」にある杵築の納屋の項に

「イワシが二十袋以上もとれると大漁祝（オオタマオコシ）をする… 百槽以上にもなるとチバナシといって全部の旗をはずし氣勢をあげる。ミト船はいつも『ホッショ ホッショ』と声をたてるが、この時かぎり『エーホ エーホ ホーランエ ヨイヤッサノサ』と掛け声をたてながら、樽叩いて沖をぐるぐるまわっている」。

また、瀬戸内の向島の木遣歌の歌い出しに「ホーランエンヤ」とあるのを見ても、必ずしも祭礼独特の掛け声とは考えられない。向浜でも大漁のときには「ホーアンエー」の掛け声で船を漕ぐとも聞いた。「ほうおんえ」は、瀬戸内沿岸に住みついた海人族独特の共通した祝詞ではないだろうか。「ほうあんえ」の語源や分布をさぐっていけば、ひょっとすると歴史・民俗の共通性・関連性が見出せるのではないだろうか。

同じ祭神をもつ神社の祭が必ずしも同じ形をとるとは限らない。お祭りの行事にあらわれる特異性や粉飾は偶然の発想で定まったものではなさそうだ。住吉様のお祭の「ほうあんえ」も、今では忘れ去られた土俗的な民間

信仰の痕跡が底流に生きていて、より一般的な格の高い勧請神である住吉社の祭のなかに息づいているのではないだろうか。 文責 入江 秀利

史料（平かな読み下し文になおす）

…宝暦四年甲戌如月頃 豊後国速見郡別府村なる舟人大坂まで渡海せむと別府浜を出せしに 伊豫沖方にて大風吹起大雨盆を返すが如降出 伊豫の沖にて舟も危く見れば 此時住吉大神に祈精を掛け撰津国の方を向 住吉大神此度難を助玉へと吾魂を失なうが如に祈念致ければ大風急静に成て海上安々として撰津に附玉ふ 夫より住吉に詣拜礼致ける 時に大神御託宣有ければ吾を祈事感するに阿万里阿里 吾神霊を豊国に祭るならば末世に至るとも汝舟を導海上を守との御告を蒙りし故 住吉大神に奉仕神宮寺に立寄右の有様を物語に社司被申には 然は住吉大神の神霊を申受て得さすべしとて一通を被下 時に永井右京其一通を頂戴致し三月二日大坂を出立 海上難なく同月十日国に帰たるなり 然に三月十九日吉日な

ればとて祠を立特に朝見宮伊織宮主として万登浜に奉鎮
座又永井右京も宮守と成て奉仕所也

宝曆四甲戌三月十九日

宮主 神 伊織